



京都東山山麓にある真々庵・根源の社の前で静かに目をして、宇宙根源に感謝を示し、また、今日1日を素直な心で過ごせるように念じることを常とした



1954(昭和29)年7月当時の音無会の記念写真。2列目右から4番目が松下幸之助。同郷同士の会合では、みな、少年時代に戻ったような心持ちでお互いに気安く言葉交わせることが魅力で、多忙な身でも出席率がよかったという

ろうと非常に興味がわいてきて、講演に赴くことにしたという。

「これは一べん行ってみたいといかん、行ってその聲がに接したいと思いました。それで、名古屋に今度私どもの新しい工場ができたから、それを見て、1晩泊まって、朝、カゴメさんに行こうと思っていたのです。すると、その晩に熱が出たんですよ。」

工場はやめてもかまわないけれど、講演には行かならんから、熱だけは引かさないといかんと考えておったんです。

そのときにホッと思ったのが、どうしてこんなに熱が出るのやろうと。風邪を引いたのか疲れたのか、原因はあると思いませんけれども、しかし熱が出るというようなことと体がけしからんと思つた。けしからんというのは、自分の心に原因があるんじゃないかということです。せっかく行こうと決意したのに、熱のために行けないということは、いかにも残念や、われながら不覚のいたりである、こう思つてね、それでじーつと考えたんです。

考えた結果得た結論は、自分は感謝の心が無いということです。

というのは、心身ともに疲れたという原因を探してみると、膀胱の検査を受けてからしゃくにさわることはかり続いて、腹を立てて、怒りを持っているんですよ。腹を

立てて怒りを持っているということは、一面当然のように思つけれども、その1つひとつを考えてみると、腹を立てなくていいことや、むしろ喜ぶべきことであつたかもしれない。

それを腹を立てているということは、自分の不覚や、これは徹底的にこの際反省しなければいけない、そうすればこの熱が下がるのではないかと、こう思つたんです。

例えば、おまえのところはもつと儲かるはずなのに、半分しか儲かっているのはけしからんやないかというようなこともありますわな。

しかし考えてみたら、半分でも儲かったら結構や、感謝しなければいけないはずや、それを働きが鈍いという腹を立てている、喜んでいいことに腹を立てるといのはせいたくや、だから熱が出たんやと、こう思つて、徹底的に反省することにしたんですよ。

そうすると不思議なもので、1時間ほどしたら、熱がだんだん下がってきたんですよ。それで、つぎの日は行くことができたのです」

松下電器の遵奉すべき精神として「感謝報恩の精神」をあげている自分自身が、1番それを忘れていたと思つたら、熱もいっしかが下がっていたと述べている。

生かされていると

感謝すれば、  
大きな喜びが生まれてくる

1976(昭和51)年10月、松下電器全寮文化フェスティバルでの若い社員たちへの講演では、自分が大学を卒業したということはだれのおかけかを、どの程度意識しているかと問いかけています。

「自分が大学を卒業したということは、だれのおかけであるかということとどの程度意識しているか。『私は大学へ行くの当たり前前や。人より頭がいいし、親も金を持っているから、大学へ行くの当たり前前や』という考えで、うかうかと大学を卒業したのであれば、その大学卒業の知識というも

のは、あだ花となって返ってくる。

しかし、「自分が大学を卒業したということは、幸いにして賢く生まれついたということと、ありがたいことや」と、その運命に対して感謝する。また大学については費用が要る、「幸い両親がそれをなすところの働きを持っていたから、行けたのだ」と、両親に感謝する。国に対しては、「そういう教育施設を作ってくれたのは、国すなわち大衆である。大衆の力の凝結したものが大学となって現れてきた。大衆の力の集合体で大学という施設ができたんや。とすると、大衆に感謝せねばいかん」という感謝の念をどこまで持てるか。

感謝の念を深く持てる人ほど立派な働きをする人であり、立派な力の持ち主だと考

えるのであります」

と、人は自分の力だけで生きているのではないと気づいたとき、そこに生かされていることに対する深い感謝と、生きていることの大きな喜びが生まれてくるものだと言った。

### 道行く人も、 みなお得意様

1959(昭和34)年1月10日の松下電器恒例の経営方針発表会では、平素より厳しい口調で松下は話している。

経営状況は、1953〜1958(昭和28〜33)年の5年間で売上は5倍の540億円になり、1958(昭和33)年も前

感謝の念を深く持てる人ほど、

立派な働きをする人であり、

立派な力の持ち主だと考えるのであります。